

故廣井勇博士追悼會

廣井先生逝いて早くも一年を迎へた。中山、名井の兩博士其他東大教授發起の下に十月一日神田一ツ橋學士會館に於て盛大なる追悼會が催された。大講堂の壇上中央に故博士の大寫眞を立て、兩側に花輪を飾り質素な設備が出来て、午後三時半綱島牧師司會の下に開會された。第一奏樂に次いで森本縫子氏の讚美歌獨唱あり、次に綱島佳吉氏の聖書朗讀があつた。其朗讀箇所は廣井先生が常に愛誦されてゐた箇所である。次に綱島氏の祈禱があつて再び森本氏の讚美歌獨唱があつた。次に札幌農學校第一期卒業生にして廣井先生と親交あつた太島正健博士の追悼演説と、廣井先生の同窓生として親交のあつた新渡戸稻造博士の追悼演説があつた。次に池邊稻生氏各地よりの追悼電報を朗讀なし、久保田敬一氏は廣井家の遺族親戚を代表して發起者及び參會者に禮を述べ、中山秀三郎博士は發起人總代と

して挨拶を述べ、最後に一同起立默禱して式は終つた。別室に於て茶菓の饗應あり、一同故博士の追懷談に耽つて五時頃散會した。

參會者は廣井綱子夫人を初め各令嬢及び親戚達を初め、古市公威男爵及び土木建築工學界の先輩名士、淺野總一郎氏其他の實業家及び軍人等約二百名に及んだ。参考のため當日の出席者名を次に録す。

廣井博士追悼會參列者氏名

○ハ發起人

井上 角五郎	井上 二郎	○井上 範
池田 勝藏	池田 圓男	○池邊 稻生
市來 尙治	岩井 芳通	稻垣 兵太郎
稻 葉 愿	磯海 國吉	橋本 正平
橋本 敬之	八田 嘉明	畠山 好伸
花村 米三郎	丹羽 鋤彦	西村 保吉
星野 茂樹	細野 芳彦	兵藤 直吉
利光 學一	留岡 幸助	富永 正義
糠澤 惟助	岡崎 正伸	岡崎 保吉
岡 胤信	○岡田 虎輔	岡田 和一郎



廣井博士追悼會に於ける新渡戸博士の演説

『人間廣井』に就て 新渡戸博士の演説

廣井博士と同窓の親友新渡戸稻造博士は本日
の追悼會で『人間廣井』を追懐して大略次
の如く述べられた。

○

廣井君如きと交らねば青年時代の危險期を
無事に過す事が出来なかつたかも知れない。
然し廣井君は聖人君子ではない、人間味に溢
れた人である。其處に我々同窓の尊敬が集つ
た、此は實に廣井君の道德的 성격に因るもの
である。

廣井君の特長は頭が良い、實に明晰であつ

た、それに學問が好きで、趣味もあり、學才
もあつた。札幌農學校在學中は農學もやり動
物學もやつた、當時廣井君が鐵砲を手に入れ
て、札幌郊外に出て鳥を捕つて来て自ら剥製
なごしてをつた。我々同宿者は其臭氣に耐へ
ないで廣井君に小言を云つた事もあつた。其
後廣井君は文學、哲學なきに没頭したが此は
青年時代の誰にもある事で遂には神學、倫理
學に熱心になつた。同時に英文學には最も趣
味をもち、日本人の心持を英詩で唱つて見た
いものだご度々云ふてゐた、當時の草稿でも
何處かに残つてゐないかと思ふ。

○

大島 正健 大島 滿一 大田 明治
大瀧 幹正 小野 常治 小川 襄亮
小澤 義平 尼崎 昌盛 奥村 簡二
和田 重辰 和田 義睦 加藤 順吉
加藤 貢 榎木 寛之 鹿島 精一
片野 文吉 樺島 正義 川上 浩二郎
金子 寛 金子 源一郎 神原 信一郎
川江 秀雄 ○吉村 惠吉 米元 晋一
依岡 省輔 竹波 喜久治 竹股 一郎
田村 與吉 ○田中 豊 武田 良太郎
高橋 孝 高橋 健之助 橋 英三郎
俵 國一 谷口 三郎 相馬 龍雄
筒井 武 塚本 靖 中桐 春太郎
○中山 秀三郎 中村 謙一 中野 寅二郎
那須 章彌 那波 光雄 永山 彌次郎
永田 民也 成瀬 勝武 村瀬 花之亮
村野 爲次 内海 清温 内田 莊一
上村 爲人 上井 兼吉 海野 力太郎
宇田 健二郎 野口 廣衛 野村 龍太郎
來島 良亮 藏重 哲三 久保 義雄
山内 不二雄 山内 治平 山口 昇
山口 準之助 ○山崎 匡輔 山倉 嘉一郎
松尾 禰 松尾 末太郎 眞野 文治
眞島 健三郎 町村 金彌 前田 與市
牧野 雅樂之丞 福田 次吉 古市 公威
古川 阪次郎 福田 十太郎 藤井 眞透
藤田 四郎 近 新三郎 近藤 仙太郎
小池 駿一 小清水 義男 江橋 貞二

江木 貴一郎 海老塚 肅 遠藤 藤吉
淺野 總一郎 淺野 應輔 阿部 謙夫
阿部 美樹志 安藤 杏一 芥川 均一
新井 榮吉 佐々木 哲二 佐々木 恒太郎
佐藤 利恭 佐藤 三四郎 佐野 利器
澤田 堅太郎 鮫島 茂 木津 正治
木村 榮 城戸 鎖吉 北村 友一
○名井 九介 三浦 七郎 御田 龍太郎
宮長 平作 宮崎 正夫 斯波 忠三郎
生野 團六 春藤 眞三 澁澤 元治
白石 多士良 平山 復二郎 久永 勇吉
物部長穂 森 勝吉 森田 三郎
森井 健介 關田 駒吉 關 毅
關口 四郎 杉山 宗治郎 杉野 敬次郎
須藤 義衛門 鈴木 雅次 鈴木 秀彦
杉本 好太郎 杉浦 宗三郎 杉 廣三郎
新渡戸 稻造

以上 163 名

電報ニテ追悼ノ意ヲ表セラレタル氏名

1. 小樽市長
1. 伊藤長右衛門
1. 佐藤釧路市長
1. 故廣井博士記念事業會北海道委員一同
1. 港湾協會北海道支部
1. 釧路築港事務所長高田庄二
1. 留萌町長

以上七通

農學校卒業前に志望が工學に決つた。然し廣井君は工學者と言ふよりも人間であつた、君は常に何かを求めてゐた、遂にキリストに依つて求めたが、それは形式的の信仰で無かつた。我々も俱に洗禮をうけて昨年が恰度五十年になる記念の會合をやつた。即ち君は死の五十年前にキリスト教の信仰に入つたのであるが、君は研究の結果入つたのではない、心に罪を感じて入つたのでもない、神に頼つて清き生活を得ん爲であつた。自分から他を推察する事は甚だ失禮な事であるが、私はそう思つてゐる。

○

廣井君は信仰に入つたが三十年後も不安があつた。信仰的には其處に悩みを感じてゐた。それが母を亡つて初めて靈魂不滅の確信を得たのである。廣井君は母の墓前に立つて、母は死んだが、然し母が虚無になつたさは何うしても思はれない。

『母は猶ほ存在してをると思ふ』

それだ、それだ、こ私は叫んだ。

死と言ふ事は信ずる事は出来るが、理解する事は出来ないものだ。

廣井君は何十年間か疑つた、大々的眞理が初めてさけた様に思つた。

○

廣井君二十二歳で米國政府の技師になつて

働いてゐた時、朝早くから出勤して夕方下宿に戻つて来て、尚ほ夜遅くまでランプの光が窓に射してゐるのを、不思議に思つてゐたが、ヒラデルヒヤで私が同宿した時に、廣井君に其事を聞いたら、

『仕事としては測量したり計算したり他の者と同じにやれば私の責任は濟むのだが、日本に残つてゐる母の事を思ふとヂツとしてゐられないのだ』

と言はれた。

明治十八年に私の母が亡くなつた時に、同窓の廣井君は『新渡戸が氣が異はねば良いがヤクを起さねば良いが、私が盛岡まで迎へに行かう』と言つた。札幌から盛岡まで十日もかかり、費用もかなりかかるが、廣井君の母に對する情愛が如何に深いものであつたかを知る事が出来る。

○

私は廣井君の如き友人を有つた事は一生の仕合せであると思ふ。廣井君は永久に我々仲間の中から全く消え去る事の無い人である。

廣井君が残してくれた大きな土産は、母に對し、友に對し、仕事に對して我々は如何にすべきかと言ふ事を示してくれた。

廣井君が身を汚さず、心を汚さず世を渡つた事は終生の感謝である。(以上)

小樽公園に於ける 故廣井博士胸像除幕式

廣井勇博士の胸像除幕式は十月十二日小樽公園東山に於て舉行された、胸像地點は小樽築港を脚下にして南、北兩防波堤を一日に見る高臺である。

除幕式は北海道廳築港課内の故廣井勇博士記念事業會にて主催され、東京よりは博士未亡人綱子及び田中夫人と吉子嬢、親戚代表として鐵道省運輸局長久保田敬一氏、其他門弟知友等であつた。

午前十時神官の修祓を以て式を初め、遺族親戚玉串を奉仕し、北海道廳技師伊藤長右衛門氏記念事業會を代表して玉串を捧げ、次いで小樽市長木田川奎彦氏の玉串奉仕あり、次に故博士令孫田中吉子嬢三

才が伊藤氏補導の下に胸像除幕の綱を引き、爰に堂々たる廣井博士の胸像は現はれた、一發の花火を合圖に港内の汽船一齋に汽笛を鳴し、今まで曇つてゐた雲間よりは陽光さへ射出した。次に北大教授古藤猛哉氏は胸像建設の事業報告をなし、池邊稻生氏は記念事業實行委員長中山秀三郎博士の式辭代讀をせし、次に久保田敬一氏遺族を代表して挨拶があつた。之に次いで次の祝辭があつた。

佐藤北大總長。池田北海道長官。塚本東大工學部部長。吉野北大工學部部長。田邊土木學會長。水野港灣協會長。門弟總代倉内氏。淺野總一郎氏。宮部金吾博士。木田川小樽市長。渡邊兵四郎氏等。

祝電を寄せたるは次の諸氏であつた。(45頁つゞく)